

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第 5 講：教えの足もとを照らす

幡鎌一弘

9 月 25 日の公開講座で、標記のテーマで講座を担当した。筆者の中では、旧稿である「ふしから芽が出る一信仰の語りの歴史」(『教祖の教えと現代—教祖御誕生二百年教学講座シリーズ—おやさと研究所、2000 年)、「復元」と「革新」(『戦争と宗教』天理大学出版部、2006 年)、「はたらき ひのきしん」(『天理教のコスモロジーと現代』天理大学出版部、2007 年)で発想したことを繰り返した感が強い。今回、『あらきとすりよう』を詳細に見ることで、戦後の青年会の動向、教団が直面していた諸問題、社会問題への構え、あるいはその後の教団運営など、興味深い点が見出された。

これらのうち、教学形成について、『みちのとも』に要旨が掲載される予定であり、全体については後日論文となる。『稿本天理教教祖伝』編纂経緯については別稿を予定しているので、ここでは、補足的に史料を一点掲出するにとどめる。

講座では、主体となる教団あるいは個人の外部にある国家・社会が、時間・時代あるいは時句と同じように親神の計らいのなかに昇華していったことに触れた。それぞれの置かれたいかなる状況も、「成って来た理」であり、そのなかで一人一人は「心の成人」を目指すことになり、国家と明確に決別したのではなかった。そのため、教えの「復元」を提唱しても、戦前の国家体制を批判することはなかったのだろう。

以下、参考史料として、『天理時報』昭和 20 年 9 月 30 日号の関連部分を紹介する。記事の内容は、9 月 19 日、総理大臣官邸で行われた教宗派管長教団統理者協議会の模様を伝える記事である。(一部文字・書式を改めた)

\* \* \* \* \*

「懺悔の実を示さん 首相宮殿下に中山管長お誓ひ」  
「教宗派管長統理者協議会」

平和新日本建設の発足□当り、国民道義振作の重大な使命を担う宗教家の奮起を望む声愈々切なるものがあるとき、戦後宗教教化の諸問題に関する各教宗派管長、教団統理者の協議会は、既報のごとく各方面の注目裡に、さる十九日内閣総理大臣官邸において開催された。

これに先立ち各派管長、教団統理者六十余名は、午前十時宮中に参内、天機奉伺の記帳をなし、午後一時から協議会に入ったが、この日、東久邇総理大臣宮殿下には、政務御多端の御中、とくに同協議会に御臨席遊ばされ、有難き御訓示を賜はった。

定刻、前田文部大臣、大村文部次官、朝比奈教学局長以下文部当局関係官および各教宗派管長、教団統理者並びに各宗務長定め席について御待ち申上げるうち、首相宮殿下御臨席、正面の御席におつき遊ばされた。かくて吉田宗教課長の司会によって開会、一同 宮城に対し奉って最敬礼ののち同課長の開会の辞があり、ついで首相宮殿下におかせられては別項謹掲のごとく御懇篤なる御訓示を賜はり、戦後における宗教教化のあり方、宗教家のむかふべきところについて、いとも御力強き御声をもって御明示遊ばされた。拝聴する一同は、身もしびれる感激のうちに新日本建設の教家に負荷された使命の重責を痛

感、これが達成を固く固く誓ひ奉ったのであった。

つづいて前田文部大臣から別項のごとき烈烈たる訓示があったのち協議に入り、まづ朝比奈教学局長から、政府の言はんとするところは首相宮殿下の御訓示、前田文部大臣の訓示に尽きてゐる。御訓示にもあったごとく、敗戦の主な理由は、国民道義の頽廢にあった。道義昂揚こそは宗教家の職責であり、新しき道義日本の建設は諸氏の奮起に俟つところ大である。この際諸氏の御意見を大いに傾聴いたしたい。時間の都合上の方から御指名するからそれによって御発言を願ふ旨の挨拶あり。まづ中山本教管長に指名あった。

中山管長は直に起つて『只今は東久邇総理大臣宮殿下から有難き御訓示を賜はり、まことに驚懼感激措くところを知りませぬ。御指名により、所見の一端を謹んで申述べさせていただきます。敗戦の一原因として国民道義の頽廢といふことをおきかせ頂き、この分野を担当いたすものとしてまことに慚慙に堪えない次第であります。これはわれわれ、否、私の深く懺悔いたすところでもあります。つきましては今後深くかへりみて懺悔の実を現はし、もって御訓示の御精神にお応へいたしたいと存じます。よろこび勇んで懺悔の実を現はして承詔必謹の誠をささげ、一は以て有難き 大御心に答へ奉り、一は以て世界の信義に副ひたいと存じます』といふ意味の趣旨を述べ、教家の使命達成を首相宮殿下の御前に御誓ひ申上げた。右発言中、中山管長は懺悔の実は「実をもって実を買うべきにある」ことを強調し、今後の荆棘の道を喜び勇んで乗り越えんとその決意を力強く述べた。首相宮殿下には終始御熱心に御傾聴遊ばされ要所々々には深くうなづき給ふ御態度に一同感激も愈々高まるのであった。

更に真宗大谷派大谷光照伯、日本天主教教団統理者土井辰雄氏起つて意見を開陳、終わるや首相宮殿下には御政務の御都合から御退席遊ばされたが、更に協議は続けられ、黒住教管長黒住宗和、浄土宗管長望月信亨、日蓮宗管長井村日成、日本基督教教団統理者富田満、神習教管長芳村忠明、曹洞宗管長高階瓏仙の諸氏からそれぞれ真摯な意見の発表があった。ついで陪席の安藤正純代議士起つて、宗教家の奮起を希む激励演説あり。教家に寄せる多大の期待を強調、最後に大村文部次官の閉会の辞をもって同四時閉会。一同固く職責完遂を誓って散会した。なほ当日本教側からは宗務長として中山総務長が陪席した。

\* \* \* \* \*

中山正善二代真柱は、文部省の担当官から最初に指名をうけているので、文部省側とあらかじめ打ち合わせがあったと思われる。清水国雄編『二代真柱中山正善伝史料集成案』によれば、上京は 9 月 16 日である(同書には、この記事が掲載されている)。東井三代次『あの日あの時おぢばと私(下巻)』に記された文部省訪問はこの時のことだろうと思われる。また、応答中「承詔必謹」という言葉があるが、これは聖徳太子十七条憲法にある言葉で、天皇の命に絶対服従することを指している。同じ紙面に、「日本再建宗教教化実践要綱」が掲載されているが、その教化目的は、「一、承詔必謹ノ態度ヲ堅持シ、国体護持ノ信念ニ確任スルコト。二、信義ヲ篤クシ、敬愛ヲ旨トシ、拳国一家万邦諧和ノ実ヲ拳グルコト。三、報恩感謝ノ念ヲ深メテ忍苦耐乏以テ各自ノ本分ニ最善ヲ竭スコト」である。

第 230 回研究報告会 (9月 17日)

「おさしづ」における「理」と述語

—理の脱神秘化あるいは脱物態化—

辻井正和

はじめに

「おさしづ」における「理」について、理にともなう動詞との関係に焦点をあてて統計的手法を用いた検討を行っているが、その結果について報告を行った。用いた手法は、コレスポネンデンス分析と呼ばれるものである。

データおよび分析結果

基礎となるデータは、「おさしづ」正巻の理の用例 15,845 例について、理の前に置かれる限定詞 (修飾語句)、理に続く助詞、および助詞の後に続く動詞を調べ、助詞別に、理と動詞を、それぞれ行と列の要素として、クロス表の形に整理した。それに対して、コレスポネンデンス分析を適用して、理と動詞のグループ化を試みた。その結果を、理-動詞の主なグループ、理と動詞の特異的結合、および単独使用の (限定詞をとまわらない) 理と強結合の動詞に分けて整理した。

◇理-動詞の主なグループ

各グループを代表する動詞は次のようである。(括弧内は助詞を示す)。

A : 尋ねる (を)、B : 見る (を)、C : 論ず・聞く・聞き分ける (を)、D : 無い (は)、E : ある (が)、F : 治める・持つ (を)、G : 寄せる・繋ぐ・合わす (を)、H : 無い (が)、I : 受け取る (は)、J : 許す・許し置く・委せる・委せ置く (に)。

各グループに含まれる「理」を見ると、心の理を含むグループ (E F G H I J) と心の理を含まないグループ (A B C D) がある。理については、筋道、根本的理法といった意味だけでなく、心の理という意味で使われることが多いのである。

◇理-動詞の特異的結合

グループというより、少数の理と動詞の結合が目立つ場合がある。一部をあげると次のようである。

いろへ\*理-を捨てる。心だけ\*理-を許し置く、は許し置く、に許す・委せる。満足\*理、たんのう\*理-を与える。三三\*理・このう\*理-を授ける・渡す・渡し置く。神\*理-を欠く。案じ\*理・善き\*理-が回る、など。

◇単独使用の「理」「一つの理」に強結合の動詞

限定詞をとまなう「理」「一つの理」の用例が少ないものである。一部をあげると、次のようになる。

単・理を一外す、失う、改める、始める、案じる、取る、出す、積む、付ける、下ろす、集める、考える、話す、伝える、許す、分かる、立てる、知らず、楽しむ、聞き取る、思う、定める、合わす。

単・理が一立つ、違う、変わる、寄る、掛かる、有る、集まる、見える、合う、下りる、成る。

いくつかのコメント

以上のような結果をもとに、天理教内での理の使用法と関連して、いくつかのコメントを述べた。

◇「運ぶ」「尽す」がグループとして出て来ないが、「尽す」については、「理を尽す」という表現がもともと少ない。「運ぶ」

については、「理を運ぶ」という表現は必ずしも少なくないが、さまざまなグループに関わっているためグループにならない。

◇ 特異的結合の中に「満足\*理を与える」があるが、動詞「与える」についての他の用例は、「たんのう\*理を与える」の 1 例のみである。諸井慶徳『たんのうの教理』では「たんのうさせる」に 1 章が当てられているが、いんねんとの結びつきのないと思われる用例の検討が抜けているようであり、「満足を与える」という面を正当に評価することが必要と思われる。

◇ 単独使用の理と強結合の動詞の中には、天理教内でよく耳にするものも多いが、「理を立てる」「理が違う」「理を失う」など、強い語感を持つものが多い。この強い語感は、理と言われるその内容が明確にされないことから来ているように思われる。しかし、「おさしづ」においては、単独使用の理は、さまざまな理を、漠然と一般的に問題として提起していることが多い。単独使用の「理」「一つの理」が、具体的に何か特定の理 (例えば、元の理、天の理など) を指して使われているとは言えない。それを、何か特定の 1 つの理を意味するものと考えすることは、理を「一即多」に近い形で〈神秘化〉することにつながるであろう。

◇ 「理を流す・理が流れる」という結合は分析結果に出てこない。「おさしづ」には、理を「流れるもの・流すもの」とするような用例、言い換えれば、理を靈妙な流体とする用例〈物態化〉は見られないと思われる。

◇ 副詞を理として扱い、聞き分け、運ぶ、治めるなどの動詞と結合させる傾向が見られるが、これは、プロセス (順序の道) が重視されていることを意味する。

おわりに

限定詞を付けずに「理」「一つの理」を使用すれば、意味が不明確になるか、オールマイティーになるかであり、理の神秘化と物態化をもたらすことにつながる。また、「満足する」と「満足\*理を与える」の間にも方向性の違いがある。理について、「おさしづ」に戻って再検討することが必要であろう。

『グローカル天理』合本のご案内

これまで出版された『グローカル天理』の合本を販売しています。これは 2000 年から 2009 年までの各 1 年分 (12 号分) を 1 冊にまとめ、簡易製本したものです (頒価は 200 円)。

毎月 25 日の公開教学講座の会場と、研究所事務所のみで取り扱っていますので、お求め下さい。郵送による販売はお断りしております。お問い合わせは郵便か FAX、もしくはメールにてお願いします。

問い合わせ先:

〒 632-8510 奈良県天理市柚之内町 1050  
天理大学 おやさと研究所 『グローカル天理』編集部  
Fax: 0743-63-7255  
E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

天理大学・マールブルク大学共同プロジェクトⅡ  
「清める一心と身体の宗教的変容」

堀内みどり

9月18日～20日、天理大学がマールブルク大学との学術的交流50年を記念して、標記シンポジウムが天理大学を会場に開催された。第1回は「相互作用としての祈り」をテーマに、2006年マールブルク大学で行われ、第2回となる今回は「清める一心と身体の宗教的変容」がテーマとなった。

18日午前のプレ・セッションでは、マールブルク大学に留学し、今回マールブルク大学の参加者の一人である、前マールブルク大学宗教博物館館長のM.クラーツ先生を師とする海外部の菅井宏史部員が、「天理-マールブルクの学術文化交流を振り返って：回顧と展望」と題して、マールブルク大学との交流の始まりと経緯について発表した。午後の公開講演では、天理から澤井義次氏が「心を澄ます—中山正善二代真柱様の著作をふまえて」、マールブルクから、マルティン・クラーツ氏が「浄一不浄の宗教的連関：宗教学的考察」と題して講演した。

19日からは第1会議室に会場を移し、マイケル・パイ・マールブルク大学名誉教授が「宗教的変容の分析における概念的パターン」と題して基調講演、以後2日間にわたり、12人の研究者が研究発表を行い、活発な議論を展開した。20日午後の「総括と展望」では、今後の共同研究について意見が交換された。なお、シンポジウムの発表者と発表題目は以下の通りであった。

- Saburo Morishita : 'Matter out of Place' as a Window into Purification  
 Gerald Marcel Martin : Ignatius' Spiritual Exercises under the Aspect of Purification  
 Ikuo Higashibaba : Penance as a Ritual for Purification: Conceptual Transformation of Christian Sacrament in Early Modern Japan  
 Katsumi Shimada : Negative Theology as "Purification" of Language: Nicolaus Cusanus on Divine Names  
 Christoph Elsas : Mystical Purification of the Mind: Meister Eckhart on Calmness  
 Masahiko Okada : Genealogy of the Discourse on Self-cultivation in Modern Japan: Enlightenment, Nation-State, Cultivation  
 Katja Triplett : Healing Rituals in Japanese Esoteric Buddhism as Acts of Purification  
 Midori Horiuchi : Self-purification through Karma-Yoga: A Case of the Ramakrishna Movement  
 Jörg Lauster : Purification and Emotion  
 Motokiyo Fukaya : Purification and Salvation  
 Ulrike Wagner-Rau : Fasting, Reflecting on the History and the Contemporary Renewal of Exercise  
 Shugo Yamanaka : "Purifying" to "Being Purified": Tenrikyo Practice of Purification

WCRPまほろば大会にパネリストとして参加

金子 昭

9月25日～27日の3日間、世界宗教者平和会議(WCRP)40周年記念まほろば大会が奈良市新公会堂などを会場として開催され、国内・海外から400人あまりの参加者があった。私は今回、急きょ大会事務局より請われ、26日午後に行われた二つの分科会の内の第二会場のパネリストとして参加した。両分科会とも、テーマは同日午前中に行われた松岡正剛氏による「まほろばの心と宗教者の貢献」を受けての討議であった。コーディネーターはビヌ・アラム女史(インド・シャンティアシュラム代表)、他のパネリストは、キム・ナンスク師(WCRP韓国委員会事務総長)、テップ・ボーン師(カンボジア仏教法王)、ウィリアム・ベンドレイ博士(WCRP国際委員会事務総長)、ムハンマド・H・ムザッファリー師(イラン・イスラーム宗教間対話センター所長)と、各国の錚々たる宗教代表の方ばかりであった。

私の発題は、大阪の釜ヶ崎で労働者たちの「支縁(切れた縁をつなぎ直し、新たな仲間の縁を作る)」活動を黙々と続けている宗教者たちの活動を紹介し、彼らの内に宗教者ならではの「まほろばの心」(豊かな感性や優れた資質の心)を見るという内容であった。「まほろばの心」を持つ者は、この世界を全体として「まほろばの地」に変えていかなければならない。教えや言葉は異なっても、宗教者であればこそ、お互いにスピリチュアルな次元での共鳴と反響を静かに広げていくことは可能である。またそのようにしてこそ、世の中に一人でも「まほろばの心」を持つ者が増えるはずである。そして、「まほろばの心」を持った者が増えれば、それだけこの世の中は「まほろばの地」になるのである。

会場からの質疑応答では、中東問題にも「まほろばの心」の発想が通用できるか、宗教者としての共鳴と反響を静かに広げていくことはいかにして可能かというものがあつた。また、アジアやアフリカでの緑化活動を通じて宗教者による平和活動を提案したいという声も上がり、活発な議論のやりとりがあつた。

今回のWCRP大会は、尖閣諸島問題のあおりを受け、中国代表が参加を直前になって取りやめたり、韓国代表者が日本の植民地支配への反省の問題を持ち出すなど、宗教者の連帯も一筋縄で行かないことが示された。しかし全体としてみると、とても充実した内容の宗教者の国際会議であつたように思う。

最終日の27日には、世界宗教者まほろば大会「まほろば宣言」が採択され、盛会のうちに閉幕した。

グローバル天理  
第11巻 第11号 (通巻131号)  
2010(平成22)年11月1日発行

発行者 深谷忠一  
編集発行 天理大学 おやさと研究所  
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050  
TEL 0743-63-9080  
FAX 0743-63-7255  
URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>  
E-mail [oyaken@sta.tenri-u.ac.jp](mailto:oyaken@sta.tenri-u.ac.jp)

印刷 天理時報社

© Oyasato Institute for the Study of Religion  
Tenri University

Printed in Japan